

「ファッションはたんに外見を飾るだけでなく、内面の表現でもあるのです。」

「装い」のなかに、その人の思想とか人格が現われます。社会的進出を果たし、自立し、自信を持って輝いている女性に、さらに輝いていただけるようにお手伝いするのが、私たちの仕事です」

満面に笑みをたたえ、張りのある声でそう語るのは、高級婦人服専門店「マリリア」の社長の方勇子さん。55歳。笑顔がとても素敵な方だ。

「マリリア」は東京、横浜に9店舗を経営し、社員30名で女性を戦力とし活躍している会社である。

私たちは東横線・日吉駅前店でお話をうかがった。

## 女性も社会に貢献できる ようにとの願いをこめて

駅から歩いて1分、交差点の角のしゃれた4階建ての自社ビルである。1階は「伊太利屋」など国産メーカーの製品、2階には世界のデルバ、ルイフェロー、ミラシオン、クロエといったヨーロッパのブランド品が勢ぞろい。店内はお得意さまをはじめ来店者の笑い声であふれていた。

3、4階は会議室や社員研修に使っている。

「社名の『マリリア』は、ブラジル・サンパウロ市で開拓のバイオニアとして大きな社会貢献をされた女性の名前です。女性も社会貢献できるようにとの願いをこめ、商標登録させていただきました」

じゃじゃ馬が素敵な女性に変身する

# プレタポルテで 女性の自己表現を サポート

今を輝いて！ 24

## 方 勇 子

ほういさこ ● プティック社長



「お客様と心と心の対話を心がけ、さらに輝くお手伝いをしたい」と方勇子さん。波乱万丈の半生もすべて自身を鍛え、磨くためと、感謝の心で行動する方さんには、縁する人すべてを幸せにという、太陽のような命の輝きがあった。

文 高橋光子 写真 与古田松市

「マイ・フェアレディ」をイメージしたシルエットの商標デザインは、方さん自身が描いたもの。

「幼いころからガタガタの人生。少しづつでもいいから洗練された素晴らしい人生を送りたい。社員も、お客さまにも素敵な人生を送ってほしい。そんな思いをこめました」

方さんの願いの通り、女性社員の接客態度も洗練されていて、実にさわやか。

「素敵なお客さまと対話させていただくためには、自分も魅力ある女性に成長しなければなりません。とても奥の深いやりがいのある仕事です」と日吉駅前店の小林さんが語ってくれた。

全店舗はオンラインで結ばれ、リアルタイムで売り上げや商品管理、顧客情報などがだれにでもひと目でわかるような、公正な経営になっている。

「伝票処理って大変努力がかかります。社員に余計な手間や時間をかけないように、うちは早くからコンピュータを導入しました」

社員のためにしたことが、結果的には全店一体化し、経営面でも大きな成果をあげているという。さらに、社宅もあると聞いておどろいた。

方さんの願いは、社員にも、お客さまにも幸せになつてもらいたい。いや、なつてもらわなければ気がすまないという強い一念で貫かれている。

だからこそ、こんなに明るく、輝いていられるのだろう。それも周りに元気をまき散らすようなパワーあふれる輝きである。たとえば太陽のような。



方さんの明るく輝く笑顔には、心からの感謝となにことも逃げずに真正面から取り組み、一つひとつ乗り越えてきた確信の裏づけが

# 目の前の壁を 乗り越えたら、どんな 視野が開けるか楽しみ

## 母の一生懸命に働く姿と 苦勞の体験が何よりの財産

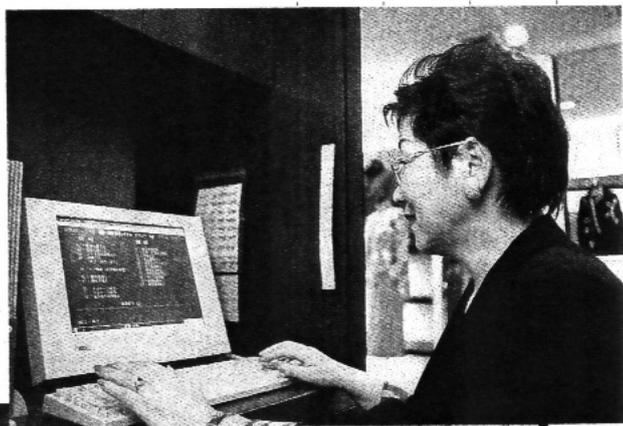
方勇子さんは1945年、終戦の年、長野県で生まれた。両親は在日韓国人。5人姉妹の長女である。

「父は純粋な人でしたが、気が小さかったんでしょね。当時の偏見もあり、定職にもつけない。その辛さをお酒に逃げ、母に暴力をふるうんです」

幼い勇子さんは毎晩のように、父の命令で、真暗な道を恐さに震えながら遠くの酒屋まで酒を買いに走った。

思い詰めた母に手を引かれ、天竜川の橋の上でうず巻く濁流を見つめて立っていたことも。「お母さん、帰ろうよ!」との勇子さんの声に、母もはっと我に返り思いとどまった。母と子どもたちみんな抱き合って、大声を出して泣いた。「母が出稼ぎにいったあと、小学2年のときから母親代わりに幼い弟妹4人の世話をし、食事の支度もしていました」

そのうちリンゴの行商を始めた母を手伝い、学校に向かう途中、駅までリンゴを運ぶ仕事をした。果樹園から駅までは45分くらいの坂道。自分の体重以上の物を背負って一歩一歩懸命に歩く。どんな



社員を大事にする発想からコンピュータを導入(写真上)  
社員研修は体験を混じえて具体的に。社外でも好評(写真中)  
方さん自身が描いた「マリリア」の商標デザイン(写真下)

に重く、背負い籠の紐が肩にめりこんでも、次の土手に着くまでは絶対に下ろせない。下ろすと立ち上がれなくなるのだ。「その体験ができるまでやる」という今の私を作ってくれたのかもしれない。ここまでこうすると決めたら、絶対そこまでやる。中途半端は気がすまないんです」

苦勞が人を鍛えるというが、幼いころからこういう頑張り精神が身につけていれば、何があっても怖くないし、何だっでできるだろうと羨ましくさえなる。「今の若い人はかわいそう。私は探さなくても、目の前の一つひとつを乗り越えるしかなかったから。そうやって体験を積み重ねていったけど」

方さんは朗らかに笑い、方さんが話すときも、韓国籍だということで、どの会社からも断られた。やっと一宮の毛織工場に就職。7

## 0000円の給料の中から40000円を母に 仕送りして、夜は学校で学んだ。 生活に困って始めた 「毛糸屋」が原点

1967年、22歳のときに日韓国人の方栄世さんと結婚(79年、夫妻ともに日本国籍を取得)。

「主人は熱心な創価学会員で、結婚するなら学会員の人と決めていたらしいんです。私も母が信心を始めて、一緒に入会していましたから」

東京・大田区で夫の家族と同居の新婚生活だった。鉄工会社の下請けをしていた栄世さんの仕事は結婚後すぐ経営難に。何か新しい仕事をということになり、方さんが編物講師の免状を持っていたので、目黒区・西小山商店街で手芸用品店を始めた。いわゆる毛糸屋さんである、

それが「マリリア」の原点となった。しかし編物ができるのと、材料を売るとでは全然違う。

「絹糸でも4種類の呼び方があるんです。『はぶ糸を下さい』と言われてもわからなくて、お客さまに教えてもらいました。誠実さと謙虚さで一生懸命やれば、商売はお客さまが作ってくださると実感しました」

店を始めたときは23歳、妊娠5か月で、翌年長女の麻美さんが生まれた。厳しい姑に仕え、大家族の家事をやり、それに育児、商売と目の回るような忙しさのなかで、がむしゃらに働いた。

生活のために必要に迫られて始めた店だが、このときすでに「マリリア」という名前をつけ、商標を作っていたというからすごい。

「女性も社会貢献をしたい。そして自分を輝かせ、お客さまにも輝いてほしい」



という仕事にたいする目標と使命感を、しっかりと持っていたのである。  
 新しくできたスーパーにも出店した。「作品見本を飾っておくと、作りたいから教えてと、婦人会、PTA、幼稚園など、いろいろなサークルで無料講習会をしました」  
 代わりに材料を買ってもらおうのだが、方さんに習った人がまた別の所で教え、サークルの輪が広がり、手芸ブームにも

### 「弱い人間が強くなる 人間革命」ってスゴイ!

乗って売上げはうなぎ上り。5店舗に拡張し、売上げ金額全国1を記録した。  
 が、方さんは走って走って走りぬいて過労で倒れてしまった。そこで、客数を減らしても客単価を上げようと、思い切った発想の転換で5店舗すべてを高級婦人服店に切り換えていった。

「人はそれぞれに個性を輝かせていけばいいの」  
 いつも笑顔の方さんの周りには、共感の輪が広がる

「商売も順調で貧乏の宿命とも縁が切れたと思ったとき、新たな宿命が襲ってきた。3歳になっていた次女の麻里さんがはしか脳炎で、意識不明の重体になったのだ。  
 「商売を始めたときは祈りも強かったのですが、忙しさにかまけて感謝も、祈りも忘れていたんですね」  
 方さんが本格的な信心に目覚めたのは、このときからである。1日10時間、12時間と必死の祈りで麻里さんは1か月後、奇跡的に意識を取りもどした。しかし記憶を失い、立つことも座ることも食べることも、手で物を握ることもできない。それを根気強く教えて、リハビリに励んだ。  
 「一つひとつ蘇生してくるさまは本当に感動的でした。人間の素晴らしさを子どもが命をかけて教えてくれました。謙虚になれと学ばせてもらいました」

麻里さんは後遺症も残らず育ち、現在レストランで働いている。長女の麻里さんは花屋に勤め、店の切り盛り一切を任されている。  
 「私たちの仕事は夢とセンス、心の満足を売らなければならぬ。だからつねに自分を磨き、人格を向上さ

せていくことが大切です」  
 方さんは社員教育にも熱心だが、自分を磨くことは、5つの心を磨くことだという。「素直な心」「反省の心」「謙虚な心」「感謝の心」「奉仕の心」。  
 「感謝の気持ちが湧き出てくれば、すべてが良い方向に向いてきます」  
 方さんによれば、口数が少なく、話しかけても返事もしてもらえなかった姑も、「おかげで相手の気持ちをおしはかる術が身につくとき、本当に感謝しております」ということになる。

そういうように、何でもプラス思考で前向きにとらえれば、全部自分の力にすることができるとの。

「すべて信心のおかげです。子どものころは父に似て、気の小さい女の子だったんです。陰でこそそそするだけで、表舞台にでるのが大嫌いな……。でも人間革命って本当にスゴいですね」  
 私たちがお会いしたときも、バリ、ミラノでの仕事を終えヨーロッパから帰ったばかり。世界を舞台に活躍している方さんの言葉だけに、余計に印象に残った。

最後になったが、そういう方さんの活躍を陰で支えている人の存在も、忘れてはならないだろう。店のオンラインシステムなどもすべて夫の栄世さんが作りあげたという。夫の理解と協力があってこそ、伸びのびと自由にはばたけるのだ。  
 太陽のように明るく輝く方さん。そのパワーでみんなを元気づけながら、ますます活躍の場を広げてほしい。